

日時 二〇一〇年十月十六日(土)午後一時三十分～五時

場所 東洋大学白山キャンパス三号館三〇三教室

参加人数 五十六名

主催 『鎮魂詩四〇四人集』出版記念会・実行委員会

共催 コールサック社

〈プログラム〉

司会 港 敦子、佐相憲一

開会の言葉 亜久津 歩

主催者挨拶 鈴木比佐雄

第一部 編者の挨拶：菊田 守、長津功三良、山本十四尾(欠席)

翻訳者の挨拶：李 美子

第二部 記念講演及び歓迎の音楽

1 ひとりの想いから—『鎮魂詩四〇四人集』に寄せて 石川逸子

2 高炯烈氏を歓迎する伽耶琴と朗読 港 敦子、港 鼓

3 演題「韓日詩人のアジアにおける役割」 高 炯烈

第三部 スピーチと詩の朗読

斎藤彰吾、森 三紗、くにさだきみ、下村和子、大井康暢、 埋田昇二、浅見洋子、楊原泰子、白糸雅樹、貝塚津音魚、

増田幸太郎、郡山 直

閉会の言葉 長津功三良

実行委員 菊田 守、山本十四尾、長津功三良、

鈴木比佐雄、佐相憲一

佐相憲一(司会) 今日はこんなに大勢来てくださって、本当にありがとうございます。(拍手)

『鎮魂詩四〇四人集』と高炯烈さんの詩集『アジア詩行』の合同出版記念会を行います。韓国から高炯烈さんが見えてますので、ご紹介します。あちらが高炯烈さんです。(拍手)

私は司会を務めます佐相憲一です。よろしくお願いいたします。

こちらは第一部の司会をして下さる港敦子さんです。

港敦子(司会) こんにちは。アンニョンハシムニカ。よろしくお願いいたします。

まず開会の言葉をいただきます。亜久津歩さんです。亜久津さんは九月に第二詩集『いのちづな』を刊行された現役の詩人さんです。よろしくお願いいたします。

〈開会の言葉〉

垂久津歩 こんにちは、垂久津歩と申します。『鎮魂詩四〇四人集』には詩二篇と装丁担当で参加させていただきました。本日は遠路はるばるの方々も多いと思いますけれども、お集まりいただきましてまことにありがとうございます。この大きなアンソロジーに込められた想いが、全ての死者の魂と残された命のみなさんのこころを癒やすものとなることを祈っております。それでは『鎮魂詩四〇四人集』『アジア詩行—今朝は、ウラジオストクで』の合同出版記念会を始めさせていただきます。

港敦子(司会) 主催者挨拶、コールサック社代表の鈴木比佐雄さんです。

〈主催者挨拶〉

鈴木比佐雄 今朝は高炯烈さんと神田から九段、外堀を散歩し無名兵士の墓である千鳥ヶ淵戦没者墓苑をおまいりしてきました。ここには第二次世界大戦で死亡したと言われる二百四十万人の内の三十四万八千人もお骨が納められて、多くの戦没者の霊が眠っています。日本がなぜ戦後に平和を求めてきたかを知る場所として、高さんにはぜひ見て頂きたいと考えたからです。高炯烈さんとは、来日された一九九九年に狛江で講演した時に初めてお会いしました。高さんのことは韓成禮さんから陝川(ハプチョン)に帰国した朝鮮人被爆者のことを『長詩 リトルボーイ』で書いた詩人として聞いておりました。私は講演の後の二次会で高さんとお話して意気投合しました。そして「コールサック」に翻訳させて欲しいとお願いしました。翻訳後にはコールサック社で刊行することを提案しました。高さんは全て任せてくれると言ってくれました。それから七年かけて韓成禮さんが「コールサック」で八千行の詩を訳してくれ、二〇〇六年の八月六日の奥付で『長詩 リトルボーイ』は刊行されました。私はこの詩集を刊行するためにその年の八月にコールサック社を株式会社にして本格的な出版社にしました。その意味では高さんという存在はコールサック社の出版活動を促したとても重要な働きをしてくれました。そのことに私はとても感謝しております。二〇〇六年八月五日には、高さんを招待して広島で『長詩 リトルボーイ』の出版記念会をしました。その折には、長津功三良さんなど広島 of 詩人たちや全国の詩人も集ってくれて出版記念会はとてもいい会になりました。その会には司会をしてくれた松尾静明さんを始め、御庄博実さん、福谷昭二さん、港敦子さん、本多寿さん、柴田三吉さん、草野信子さん、佐川亜紀さん、真田かずこさん、平原比呂子さんなど多くの詩人が駆けつけてくれました。長津さん、李美子さんと私は、高さんと二泊三日ほど行動を共にしました。その際に今後も「コールサック」に継続的に詩を書いて欲しいとお願いしたところ、アジアの国々に旅行すること多いので、「アジア詩行」という連作を書いてみたいということになりました。そして四年がかりの李美子さんの翻訳のおかげで六十数篇がまとまり、詩集『アジア詩行』が誕生しました。高さんと十年がかりで二冊の本を刊行できたことはとても嬉しく思っています。

それから長津功三良さんや御庄博実さんたち広島 of 詩人や浜田知章さんと原爆詩運動を切り拓いてきた長谷川龍生さんたちが『原爆詩集』を二〇〇〇年代になり構想していたことを聞いておりました。私は長津さんにコールサック社にやらせて欲しいと伝えていました。高さんの『長詩 リトルボーイ』を刊行することによって、長津さんは関係者を調整してくれてコールサック社で刊行することを決断してくれました。二〇〇七年八月には『原爆詩—八一人集』日本語版を十二月には英語版を刊行することができました。その時には『大空襲詩集』も『原爆詩集』の後に刊行する構想があり、二〇〇九年三月に『大空襲—三〇人詩集』が刊行されました。私の中では原爆や空襲以外で亡くなった、他国で亡くなった多くの戦死者を慰霊する『鎮魂詩集』を刊行したいという思いも当初からありました。また「鎮魂」の範囲をもっと広げて、古代の万葉時代の挽歌や現代の様々な死者や、今回編者になっていた菊田守が得意とする地球の他の生きものの死を慰霊する詩篇群を含めて行きたいと構想しました。そのような流れの中で多くの皆様のご支援のおかげで今回の『鎮魂詩四〇四人集』が成立していったのです。私が詩論で構想してきたことは、この『鎮魂詩集』でほぼ達成できたと思い、多くの皆様に心から感謝したいと考えております。これからは高炯烈さんのようなアジアの詩人たちとアジア、世界を視野に入れた詩運動や詩書作りも考えていきたいと考えております。

来年は司会の佐相憲一さんや装丁をした垂久津歩さんたちの若手が編者となった詩選集も考えております。

今日は二冊の本の刊行を祝って、石川逸子さんと高炯烈さんの二人に講演をお願いしています。また多くの皆様からお言葉を頂戴し、朗読もお願いしたいと考えております。宜しく願いいたします。

〈第一部 編者の挨拶〉

港敦子(司会) それでは第一部『鎮魂詩四〇四人集』の編者の挨拶です。山本十四尾さんは本日はどうしても来られないご用事がありまして欠席でいらっしゃいます。菊田守さんと長津功三良さんにご挨拶の言葉をいただきます。まず、菊田守さんをご紹介します。詩集『かなかな』『天の虫』など。日本現代詩人会の理事や会長も務めてられました。菊田さんよろしく願いいたします。

編者の挨拶①

菊田守 みなさんこんにちは。ご紹介いただきました菊田です。今鈴木さんがいろいろお話されましてけれども、鈴木さんはすごい情熱があるんですね。ある夜ですね、電話がありまして、今度鎮魂詩集を出したいんだけど、ひとつ菊田さんにも手伝って欲しくないか。人間だけでなく、生きものも入れたいんだ、というお話がございました。それを聞いて私はすぐその場で、それはいいことだから協力させていただくよということで、編者の一人となりました。それで、生きものの鎮魂を書いた詩人たちの著作権というものがあるんですね、著作権は今日本文芸家協会が扱っていて、おそらく請求がいったと思いますが、そういう大変な作業があつて、申し訳ないが私がやらないで、鈴木さんがやって下さいました。

話は飛びますがけれども十八日明後日から名古屋で、生物多様性条約に関して生物の多様性ということとで一九三カ国の人たちが集っていろいろやるわけです。人間というのは、みなさん朝からご飯を食べて、お昼も食べてきたんだと思うんですが、他の生きものによって生かされている、自分だけでは生きられないです。私も昼つぶらそばを食べたら、海老をいただいている、朝はご飯をいただいている。数年前あるところへ梨狩りに行きましたら、蜂が飛んでいる、一緒に行ったある人が「蜂なんかいなきゃいいのに」とおっしゃいました。ちょっと待ってよ、蜂がいなきゃ食べられないんだよ。ミツバチやスズメバチが出ているけれど、みんなは蜂蜜を食べたりしているわけですが、そういうのはつい忘れてしまうんです。生きているものが生きているもののお世話になって、私たちは生き続けている。鎮魂詩の中に生きものを入れていただいた、それはそういう意味があるわけです。例えば今、雀がしょっちゅうはいなくなりましたね、もう都会の四分の一くらいは減ったと言われています。蛙はほとんどいなくなっちゃった。蚊が飛んでくると文句を言い、蜂が飛んでくると文句を言い、そして大雨が降ったら大変だ、やれ豪雨になったら大変だ、といろいろ言うけれど、最終的にはですね、私たちは生きているんじゃないで生かされているんだ。そういうことをですね、この鎮魂詩を集める編者の一人として思っております。すばらしい本ができました。今日みなさんお集まりいただきありがとうございます。

私はちょっと病気をしまして、両目を手術して、おかげでもう眼鏡をかけないで歩けるようになりました。右目が0.8、左が1.2になりました。これも生きもののおかげで薬ができる。ということを考えてこれからも私は生きていきたい。詩を書く人がどうやって生きながら詩を書いているのか、そういうことを常に考えていきたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

港敦子(司会) ありがとうございます。次に長津功三良さんよろしく願いいたします。

長津さんは広島原爆などをテーマに詩を書き続けておられます。詩集『影たちの葬列』で現代詩平和賞、詩集『影たちの墓碑銘』で小野十三郎賞を受賞されています。今日もはるばる遠い所からありがとうございます。

編者の挨拶②

長津功三良 みなさんこんにち。十月だというのに今日も二十五度を超える異常な状態で、このところそういう異常気象が続くので、地球を孫の代まで残せてやれるんだらうかという心配をするような時代になっちゃってとても心細いんですね。宇宙という言葉、生きとし生けるもの、みな命、まあ宇宙ということを見ると、宗教哲学がなにかにいかない限り、逃げられなくなっちゃうんで、そういう話はしません。

高炯烈さんが詩集『リトルボーイ』を出されて、東京でも出版記念会をやられたらしいんですが、広島では是非出版記念会をやりたいというのが、鈴木さんたちのご縁の始まりで、その頃、長谷川龍生さんたちと、長い間広島で原爆詩集というのを編纂していないので、なんとか考えようやということで、何社か出版の企画を持ち込んでいたのですけれども、どうも商業ベースに乗らないということで、二年ぐらいちょっとポシャッていたんですね。たまたまそういうことで鈴木さんがいらっやって、いや是非俺のところでやってやるよ、俺もそういう企画を持っていたんだ、ということで一緒に『原爆詩一八一人集』をやりました。いつも通りなんです、鈴木比佐雄さんがほとんど馬車馬の如くみなさんにお声をかけ、引っ張っていただいて出来上がったと思うんです。あの時は少し急ぎまして、なんとか今のうちに出したい、という気持ちが強くて、いずれ何年か先にはもっとしっかりとした『底本 原爆詩集』と呼べるものをお願いしたいと思うのです。

今回の四〇四人詩集には、私は原爆のことじゃなくて、なくなった愛人の詩を書いています。妻のことですが、載せさせていただいてます。人間の生き様それぞれもろもろあるわけですから、やはり失うとぼっこり半分持っていけますので、なんともつらい。

大勢のみなさんがお声かけに協力をしていただいて、これだけ立派な本が出来て、定価も六〇〇頁を超えているのに二一〇〇円と格安で、出してくれたこと自体が、一人でもたくさんの人に読んでいただきたい、という願いだと思いますし、読んでもらう輪を広げられたらと思います。

今日、みなさんが暑い中をお集まりいただいて、大変うれしく思っております。ありがとうございます。
(拍手)

港敦子(司会) ありがとうございます。それでは、合同出版記念会ということで、高炯烈先生の『アジア詩行』の翻訳をされました李美子さんのご挨拶です。詩集『はるかな土手』などを刊行されています。在日女性の文学史「地に舟をこげ」、戦争と平和を考える詩の会「いのちの籠」などに参加されています。このたびは三日間の通訳でお疲れ様でした。よろしく願いいたします。

翻訳者の挨拶

李美子 四年間があつと過ぎてしまつて、広島で『リトルボーイ』の出版記念会に偶然参加しました。というのは韓国からいらっしやる通訳の方が、急に来られなくなりまして、私が鈴木さんに頼まれまして引き受けました。その時に高炯烈詩人と初めてお会いして、それまでも「コールサック」では「リトルボーイ」の連載を読んでいたんですが、それからもっと真剣に読むようになりました。帰りのバスの中で『アジア詩行』というものをこれから連載する予定だということを鈴木さんと高さんのお二人が話しているんですね。もう話がずいぶん進んで、じゃあ翻訳は、ということですぐそばにいた私が偶然どういうわけか引き受けることになりました。それから四年がたつて六十何篇になったのでそろそろまとめていいんじゃないか、ということで一冊の本になりました。

私は生来なまけもので、背中をどんどん押されないと何もやらないタイプなんです。四年の間に、「コールサック」は年に三回出ていますから、十篇ぐらいずつ送られてくる詩を、辞書を片手に翻訳しました。私は在日二世の韓国人です。みなさまは韓国人だから母国語ではないかと、簡単に出来るんじゃないかと、お考えかもしれませんが。バイリンガルとよく言われますけれども、とてもそういうわけにはいなくて、日本に生まれ育つたので文化も言葉も全て日本の中にあります。ですから、外国語に近い。日本語が母国語に近い。日本の人たちと違うのは、少し韓国のことが、その気持ちがわかるかなあ、という程度ですけれども。毎回毎回いただいた原稿を翻訳する中で、日本語と韓国語の違い、よく似ているんですけれども、違うところも感じました。間に日本と朝鮮半島とのいろいろな歴史的問題があったり、ころをわかりあうところまでいっているんだけれども、説明しづらいところ、ルビを付

けたり解説をいれないとわかってもらえない、というところがあるんですね。今回の高炯烈さんの詩集にも翻訳者の注を入れました、本当は注が入らないほうが詩集としては読みやすくていいんですが、仕方なく入れました。距離を縮めたいという想いがありますが、韓国にもっと近付いてきて欲しいという意味も込めました。

どうもありがとうございました。（拍手）

〈第二部 記念講演及び歓迎の音楽〉

佐相憲一（司会） 李美子さん、ありがとうございました。

それでは第二部に入ります。『鎮魂詩四〇四人集』出版を記念して今日講演していただくのは、石川逸子さんです。季刊誌「ヒロシマ・ナガサキを考える」や詩誌「詩区かつしか」を出されていて、詩集『狼・私たち』『千鳥ヶ淵へ行きましたか』『ロンゲラップの海』など数々の優れた詩集を世に出されてきました。これまでにH氏賞、地球賞を受賞されている大ベテランの詩人です。石川逸子さんよろしくお願いいたします。

記念講演①

石川逸子「ひとりの想いから—『鎮魂詩四〇四人集』に寄せて」

はじめに

レクイエム四〇四人集は、柿本人麻呂からはじまり、アフガン戦争までの死者を対象とし、ヒトだけでなく、ヒトによって殺され、あるいは絶滅されかかっている他の生物まで含めた、実に壮大なアンソロジーといえるでしょう。

このぼう大なアンソロジーを企画、立案、編集なさった方々に心から敬意を表します。

それぞれの鎮魂の詩は、詩人たちの私的な思いから生まれ、言葉に紡がれたわけで、私的な思いはきちんと表現されたとき、普遍的なものに広がって、読むものの心に染み入っていくようです。さらに時空をも、軽く、超えていきます。

柿本人麻呂の嘆きも、蕪村のさみしさも、無理なく現代の私たちの心に入ってきて、さながら自分の気持ちを代弁してくれたかのようにも感じられるのですから。

たとえば、私は、総武線の小岩に住んでいますが、一駅先の市川の真間に、手古奈霊堂があります。もし、八世紀に高橋虫麻呂というさして身分の高くない役人が、真間を訪れて、その当時、すでに伝説となっていた手古奈を偲ぶ、すぐれた歌を作らなかつたら、多分、その伝説は消えていたのではないのでしょうか。

粗末な着物を着て、飾り物も身につけず、すあしで歩いていた真間の少女は、錦綾に包まれた娘よりはるかに美しかった、そして沢山の男に言い寄られたけれども、だれにもなびかず、真間川に身を投げたという伝説に、虫麻呂が反応し、詩を手古奈に捧げました。私は、手古奈はアイヌの娘であり、新しい武器をもって侵入してきた男たちに決してなびかず、身を投げたのであろうと推察しています。虫麻呂の詩はそのことを暗示しています。

そして、今、手古奈霊堂は、安産の神となって人びとがお参りし、近くでは手古奈まんじゅうが売られています。魏志倭人伝に記された実在のヒミコ、強大な邪馬台国の女王の在り処が、今は不明となっているのに、くつもはいていない、粗末な服を着た一人の少女の、奥つ城どころが、今に伝わっていること、これはまさしく詩の力だといえないでしょうか。

一、尹東柱の詩

ほんとうに詩はふしぎなもの。

韓国の詩人、尹東柱(ユン・ドンジュ)の場合もそうです。

日本に植民地支配されたゆえに、生前、一冊の詩集も出すことができず、書いた詩の多くも特高警察によって没収されてしまった彼は、韓国でも、もちろん無名の詩人でした。

そして無名のまま、日本が禁止したハングルで、詩を書き続け、そのことが犯罪とされ、一九四五年二月十六日、福岡刑務所の獄中で、たった二十八歳で殺されてしまいました。

生前、出そうとして出せなかった自選詩集「空と風と星と詩」十九篇を、彼は三部書写し、一部を自分が持ち、後の一部は教師、もう一部は後輩の鄭炳昱(チヨン・ピヨンウク)に贈りましたが、残ったのは後輩が持っていた一部だけ。それも、鄭炳昱が徴兵されるとき、母に保管を頼み、頼まれた母が、床下の甕に他の貴重品とともに隠して守ったからなのです。

いま、尹東柱は韓国では国民的詩人で、韓国の誇りですし、日本にも彼が学んでいた同志社大学に詩碑が建ち、宇治でも詩碑ができ、建立場所を見つけるだけになっています。中国でも北間島(プツカンド)明東(ミヨンドン)村にある彼の生家を大切に保存していますし、日本でも彼の詩のファンはあまいたいて、劇になったり、生家にまで行くツアーがよく組まれるほどです。

志操高く、平易で、民の立場に立ち、闇のなかでも、やがて来る春を信じた彼の詩は、多くのひとびとをやさしく元気づけるのです。

有名な「序詩」は、「すべての絶え入るもの」への鎮魂の詩でもあります。

死ぬ日まで天を仰ぎ／一点の恥じ入ることもないことを／葉あいにおきる風にすら／私は思わずらった。／星を歌う心で／すべての絶え入るものをいとおしまねば／そして私に与えられた道を／歩いていかねば。(金時鐘訳)

〈すべての絶え入るもの〉は、植民地支配に抗したために殺されていった無辜の同胞であり、朝鮮総督府が滅ぼそうとしている風習であり、言葉であり、創氏改名によって消されようとしている姓名でもあるでしょう。栽培を禁止されたムクゲの花であるかもしれない。ひとに潰される虫であるかもしれない。

尹東柱が毅然として歩いていった道は、〈すべての絶え入るもの〉をいとおしむ、いわば凶暴な権力とは正反対の道です。そして歩き続けた詩人は、命を奪われましたが、必死で彼の詩を守りぬいた友人たちによって蘇り、強大と思われた大日本帝国はあっけなく敗れ去ったのでした。

二、陳輝(チエンホイ)の詩

九州にお住まいの詩人、秋吉久紀夫氏が紹介された、中国の詩人、陳輝の詩も忘れられません。一九二〇年生まれ陳輝は、十八歳で八路軍に入っています。抗日の詩を戦場で書き、ガリ切りして、村々にばら撒きに行ったりしています。なかなか良い詩が多いのですが、一九四〇年深夜、「ひとりの日本兵」という詩を書いています。

原野で胸部を弾丸に貫かれ、息を引き取ったひとりの日本兵について詠んだ詩です。ふたりの中国人農夫が岡の上に彼を埋葬しています。

ひとりの日本兵が／晋察冀(チンチャーチー)の原野で息をひきとっていった。／彼の眼窩には／赤黒い血が凝固し、／あふれるばかりの涙を凍らせ／悲しみを氷結させていた。／／彼の手は、／力なく／正義の弾丸に、／射ぬかれた若い胸部に／あてがわれたままだった。／／ふたりの農夫が、／鋤を担いで、／やって来て、／彼を華北の岡の上に埋葬した。／(略)／中国の雪は音もなく／彼の墳墓の上に降りていた。／／このうら淋しい夜中、／とおい海をへだてた故郷の寒村で、／腰の曲がった老婆が、／まだらな白髪を垂らして、／いつしんにはるかな戦地の息子の無事を祈っているにちがいない……(秋吉久紀夫訳「ひとりの日本兵」)

攻めてくる侵略の兵士の死を悼み、その兵士の母の悲しみを思いやった若い詩人。残念ながら、彼は、わずか二十四歳で死んでいます。一九四五年二月八日、日本軍に包囲され、手投げ弾で自爆したのです。尹東柱の獄死の八日前でした。

陳輝の首はみせしめのために、柳の樹に吊り下げられています。

なお、陳輝の墓所を訪ねた秋吉氏によると、ニメートルもある墓石は、彼を慕う村人たちが運んできたものだそうです。

尹東柱といい、陳輝といい、なんとすぐれた若い詩人たちの命を、日本の国家は無残に殺してしまったことでしょう。しかし、その詩は残って、輝きつづけています。

三、槇村浩の詩、小熊秀雄の詩

では、陳輝のように、アジア侵略のなかで、その不当に憤激し、非業の死者たちを追悼する同時代の、日本側の詩はあるでしょうか。

朝鮮民族につよい思いを寄せた槇村浩の長編詩「間島パルチザンの歌」が書かれたのは、一九三二年。

おゝ三月一日／民族の血潮が胸を搏(う)つおれたちのどのひとりが／無限の憎悪を一瞬にたゞきつ
けたおれたちのどのひとりが／一九一九年三月一日を忘れようぞ！／その日／「大韓独立万歳！」
の声は全土をゆるがし／踏み躪られた××(日章)旗に代へて／母国の旗は家々の戸ごとに翻った
／／胸に迫る熱い涙をもっておれはその日のことを思ひ出す！／反抗のどよめきは故郷の村にまで
伝はり／自由の歌は咸鏡の嶺々に飢した(槇村浩「間島パルチザンの歌」部分)

海軍の敷地に入って反戦ビラを撒いたりした彼は、逮捕・拷問により精神を病み、一九三八年わずか二十六歳で亡くなりました。長いことお墓もぼうぼうの草に埋もれたままの状態でした。

ところが彼の詩は、今、サハリン在住の朴享柱(パクヒョンジュ)氏によって、一九六二年、ロシア語に訳されています。どう詩はめぐりめぐってサハリンにいったのか、チェホフ朝鮮中学校で教えられていたようで、作者は朝鮮人と長く思いこまれていたようです。詩が生まれてから三十年経っていることを思うと、詩は時空を超えて息づくことを改めて感じてしまいます。

一九三〇年代後半に小熊秀雄が、書いた長編詩、「長長秋夜(ぢやんぢやんちゆうや)」も忘れてはならないと思います。

長長忌で、この作品の韓訳を朗読された在日の詩人、姜舜(かんすん)さんは、リズムがパンソリに似ていてとても翻訳しやすいといわれていました。

川岸で、洗濯している白衣の老女たちに、黒い服を着ろ、黒い服なら洗濯もいらん、とその白衣に墨をひっかける日本人たち。それでも翌日には汚された服をかかえて川で洗濯する老女たち。

かよいい手をふりあげて／強く石を打つ／強く朝鮮の歌をうたひだす／黒く汚れた白衣を棒(パンチ)でうつ／うつパンチも泣いてゐる／打たれる白衣も泣いてゐる／うつ老婆(ロツバ)も泣いてゐる／すべての朝鮮が泣いてゐる(「長長秋夜」部分)

いま、彼の詩は、岩波文庫に載っていて、編者の岩田宏さんが、そのなかで次のように書いています。

「一九四〇年十一月、大勢の詩人たちが『新体制運動』の呼びかけに応じて団体を結成し、まもなく小熊のかつての仲間えもが『愛国詩』の動きに加わろうとした頃、あの上川原野の空間とは似ても似つかぬ豊島区千早町のアパートの一室で、詩人小熊秀雄は息絶えた。」

このように、日本でも、すぐれた詩人たちが、官憲によって死へ追われたり、生活の糧を失って亡くなっているわけですが、その詩は今もいきいきと生きつづけているふしぎさを感じます。

四、ヒロシマで

私が、戦争による彼我の死者について思いを馳せるようになったのは、ヒロシマへ行ってからでし

た。

広島では、私と同世代の少年・少女たちが、建物跡片付け作業にかりだされ、大勢亡くなっていました。なかには三月十日の東京大空襲で家を焼かれ、広島へ疎開したばかりで、死んだ子もいました。

私が、はじめて広島に行ったのは一九七五年で、原爆が投下されてから三十年経っていました。それなのに、わが子を亡くした親たちの悲しみが、薄れているどころか、周囲が平和になっていくにつけ、むしろ深まっていることを知りました。

さらに、爆心地に近い河村病院というところで、民間カンパで渡日し、病気を治療されていた在韓被爆者の方たちにお会いすることで、日本人被爆者との違いを知りました。

日本人被爆者の証言は、米軍によって原爆が投下された八月六日から始まるのに、被爆者韓国人の方々の証言は、それ以前、なぜ日本に渡ってくるしかなかったか、その理由からはじまるのでした。

ある方は、子どものとき、休み時間でも日本語で話さないと罰点がふえ、辛かったと言われました。わずか一ヶ月前に日本に来たという女性は、朝鮮総督府によって洗いざらい穀物を供出し、食べるものが何にもなくなって已む無く親戚がいる広島に来た、まるで原爆にやられにきたようなものだと言われました。

ある方は、畑で働いているところを突然連行され、広島・三菱の軍事工場で働かされ、被爆しています。

今日、お見えの高炯烈(コ・ヒョンヨル)さんは、戦争を知らない世代なのに、八〇〇〇行に及ぶ長編叙事詩、『リトルボーイ』を書かれました。朝鮮人少年、中輝(ジュンフイ)と、原爆・リトルボーイそのものを主人公に設定するという、日本の詩人がなし得なかった壮大な視点で、民族を超えた反戦詩にまで昇華されています。

エピローグの最後は、次のようです。

私たちは未来の悲劇を知りながら、その道を歩いていっている／私は静かな心の窓の中から破壊される窓の外この世の終りを眺める／／そこでは自然と人と世界が見えない

五、彼我の死者への鎮魂

かつては日本でも、戦争による死者は、敵味方問わず丁重に悼まれていました。

元が攻めてきたときも、あるいは幕末、長州藩が京都御所を攻撃したときも、鎌倉幕府あるいは朝廷は、戦いが勝って終わったあと、丁重に「敵方」の死者を弔っています。

死者となってからまで〈敵〉とみなし、乱暴に扱うようになったのは、戊辰戦争以後です。彰義隊や会津藩の戦死者は、遺族が路上から引き取り、弔うことさえ許されず、路上に放置し、腐るままに任せろ、と命じられました。

あまりにも不憫とおもって会津藩の少年白虎隊四名の遺体を引き取って、寺に埋葬した農民は逮捕され、遺体を元の飯森山に戻すことを約束してやっと釈放される始末だったのです。

旧会津藩士の嘆願により埋葬許可が下りたのは、半年後。それも、あらむしろに包み、荒縄で引きずっていくことが条件でした。

天皇をかついだ軍隊、官軍は、それどころか、勇気が沸くというので、「敵」の遺体の肝を取って食べたりまでしています。ほんの百五十年前のことです。

その果てが靖国神社。

同じ日本人でも、皇軍、天皇をかついだ軍、に敵対したかわは、〈賊〉とみなされ、一切、祀られてはいません。

反対にどんな理不尽な行為、たとえば強かんしたもの、〈神〉になっています。

「敵方」の死者への怖れを感じなくなった明治以後の日本国家は、それだけで、不遜であり、精神的に退廃していたのではないでしょう。

いま、沖縄に駐留しているアメリカの海兵隊。その去就をめぐって問題になっていますが、この海兵隊が侵略地でやっていることも、かつての日本軍と同じ。

昨年亡くなったネルソンさんという黒人の方がおられます。今年出された『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか』という本で知ったのですが。

貧しいゆえに海兵隊員に志願したネルソンさん。殺せ！、殺せ！ 夜中でもふいにたたき起こされ、殺せ！と言わせる凄まじい教育をされ、ベトナム戦争に従軍、ベトナム人を人間とは全く思わず、命令にしたがってどんどん殺していきました。

しかし、あるとき民家の壕に隠れていたベトナム女性が、一人で出産する現場に居合わせます。相手も自分たちを同じ人間だったのだ！ とはじめて気付き、悩むようになっていきます。

帰還後、精神を病んだネルソンさんは、やがて熱心な反戦者となり、ベトナム戦争に出かけるとき駐留した沖縄へやってきて、基地の兵士たちに「殺してはいけない。殺されてはいけない。」と呼びかけました。やがて日本に憲法第九条があることに感激し、第九条こそ世界から戦争をなくす唯一の道だと確信するようになります。

日本各地を旅して、基地の米兵に、あるいは日本人に戦争に反対するよう呼びかけていたネルソンさん。詩は書いていませんが、講演のなかでこれこそ詩だ！ といえる言葉があります。

ベトナム女性の出産について、

「初めに清らかな水が噴き出し、そこから赤ん坊が生まれた。人のいのちが水とともに生まれてくるその水は、涙という懺悔の水に深くつながっているのだ」

こう言われています。意味深い言葉だとおもいます。

ネルソンさんは、今、仏教徒として、日本の寺に眠っておられます。

六、日本の問題

四〇四人集が、地球の生き物たちへの鎮魂で終わっているのは、とても意義深いことに思えます。

二十世紀、二十一世紀になっても、人類は、科学の名のもとに沢山の他の生、物を絶滅の危機に追いこんでいるのですから。このままでは他の生物たちにとって、人類は一刻も早く滅んでいったほうがいい生物でしょう。

人類は傲慢になりすぎたのでしょう。

日本人は、かつて、馬供養、牛供養、人形供養、筆供養、生物でないものにまで感謝し、供養する、素朴で敬虔な心を持っていました。

ところが十数年前だったと思いますが、韓国の大学の先生が学生たちを連れてフィールドワークに日本に来られました。

松代大本営を皮切りに、靖国神社、上野にも行かれました。

その方たちと交流会が持たれたとき、韓国の先生が言われました。

「上野には馬を弔う碑があった。日本人は針や人形まで供養すると聞いた。人間以外の生物、さらには生き物でない針や人形や供養する日本人が、なぜ、鉱山・炭鉱・松代大本営などに拉致され、酷使の果て、殺されていったおびただしい朝鮮人について悼む心がないのか。」

こう言われました。

今年ようやく荒川土手近くに、関東大震災で官憲ほかに虐殺された朝鮮人を追悼する碑が建ち、秋田・大館には強制連行され、殺された中国人犠牲者を悼む記念館が、民間の力でできました。

しかし、朝鮮人一家が独力で作られた丹波マンガン記念館記念館は、閉館を余儀なくされ、再建のメドがまだ立っていません。

アジア・太平洋地域の方たちだけではありません。

日本の空襲被害者を悼む碑も、国は作っておりません。

日本人であっても、軍人・軍属でない民間人戦災死者を国は差別し、戦災死者は、国と契約していなかったからと、横死、野たれ死に扱いにして、いっさい放置してきました。

戦争で両親を失った戦災孤児の方々、障害者になられた方々は、全く自力で、辛い戦後を生きてこられ、これはおかしい、とようやく声を上げたのは昨年です。暮らしに追われ、立ち上がる余裕もなかったのです。

六十五年前の戦争が引き起こした問題に、まだ後始末ができていないというのは、恥ずかしいことです。

また、後始末をしていない、検証し、死者たちをきちんと追悼していないゆえに、やたら狭隘なナショナリズムを煽る政治家や言論が大手を振って跋扈しています。

フィリピンで、二十四歳で戦死した竹内浩三。

出征前に、自身の死を予想して、「骨のうたう」というスゴイ詩を書いた竹内浩三が、そんな下界をそっと見ている気がします。

そして、一人ひとりの想いがこもった四〇四人のレクイエムアンソロジーを見て、ちょっと肯いてくれるかもしれません。拙い話をご清聴下さいまして、有難うございました。

(拍手)

佐相憲一(司会) 石川逸子さん、ありがとうございました。 (拍手)

大変鋭いお話で、ああ石川さんまだまだ元気だな、と勇気づけられました。私はこの鎮魂詩集を実際に作ってしまって、先にみなさんの作品をお読みして感じたのは、寿命で亡くなった方のことを書いた詩は、読んでいてしみじみと共感し、書いた人の想いが伝わってじんわりいい感じなんですね。それに対して、戦争などで亡くなった方を書いた詩を読みますと、作者とともに、怒りなどもともにして、なんでこんな理不尽なことになるのかとを感じるんですね。外にいきますと情報が氾濫していて、八月が過ぎると戦争の話はなかなかさなくなっています。そんな時に石川逸子さんに日本の大変痛い話などもしていただいて、本当によかったと思います。石川さんのお話はユン・ドンジュや高炯烈さんなど韓国のお話とも結びつけていただいて、これで一つになったなあという感じでお聞きました。どうもありがとうございました。

後ろのあの美しい衣装を着た変身女性は誰でしょう。先ほど第一部の司会をしていただいた、港敦子さんとお嬢さんの港鼓さんです。(拍手)

高炯烈さんの詩集出版を記念してぜひということで、親子でご登場です。港鼓さんは小学校三年生です。五歳の頃より韓国の伝統音楽を学ばれ、こどもだけのチャンゴグループなど各地で演奏されてきました。趣味はお料理、工作、歌で、好きな詩人はお母さんの港敦子さんだそうです。(笑い)。港敦子さんは一九七一年生まれで、詩の創作のほか、先住民族、特にアイヌ民族の口承文芸、ユーカラなどの朗詠や紹介をされています。

港さん、この楽器の説明などもして下さい。娘さんがこの韓国の楽器を演奏されます、そして、お母さんの港さんが高炯烈さんの詩集『アジア詩行』より二篇詩を朗読して下さいます。よろしく願いします。

歓迎の音楽と詩の朗読

港敦子・港鼓 「高炯烈氏を歓迎する伽耶琴と朗読」

(港敦子)

高炯烈先生の詩を読ませていただきます。この楽器はカヤグムという韓国のお琴です。うちの娘はこれを習っているんですけども、今日は秋の曲や韓国の民謡なども織り交ぜながらお送りします。

シカの記憶 —日本 宮島で 高炯烈

シカのとなりにたたずむと／ぼくはシカにもおよばない／鼻筋の低いぼくだが／その中身はぼろぼろ破れほころび／はらわたでいっぱいだ／／宮島のシカ、／きみはつくられたときのまま／自然のシカとしてある／人間のあらゆる終わりは痛いもの／秋の花の音楽を聴いている

(港鼓演奏)

(拍手)

(港敦子朗読)

あなたのくのに朝顔 —佐川亜紀詩人に 高炯烈

ぼくらの祖先を見下げないで。ぼくがあなたの祖先を無視しないように。

朝鮮の山のような詩、日本の桜のような詩、そっくり同じでなくとも、ぼくらは地球の東がわに住んでいます。感情的なことは言いません。土地を奪われことばを奪われた記憶、血の吹き出るほど朝鮮を支配した軍靴の歴史を持ち出したくはないでしょう。

あなたのくにくにに来てひらがなで話しカタカナで笑う女性たちの口をそっとながめます。彼女たちの口のごきごきに惹かれます。ぼくらがハングルで話し、腹を立てる声も聞いてごらんなさい、たのしいんじゃない？

感傷的とは言わないで。こうぼくは言おうと思う、あなたのくにくにの八月の朝、垣根沿いにつたって伸びるみどり蔓の先に、薄むらさきの花が咲いたら、

“見知らぬ道ばたの朝顔、朝顔”と呼びましょう。

ありがとうございました。（拍手）

佐相憲一（司会） お二人、ありがとうございました。私も韓国へまた行きたくなりました。

韓国の衣装を着て、日本と韓国の曲を演奏して下さい、高炯烈さんのすばらしい詩を朗読していただきました。

さて、みなさんお待ちかねの高炯烈さんの講演です。先ほどお話し下さいました李美子さんが通訳して下さいます。この詩集『アジア詩行』を作る過程で私は校正を担当しましたので、いち早く読ませていただきましたが、東南アジアなどの庶民の風景が出てきたり、北京やウラジオストクが出てきたりして、韓国も戦後なかなか辛い歴史を経てきて、随分変わったんだなあ、という感じも受けました。これは単なる旅行記の詩集ではなく、時代の精神性と歴史をつなぐ広い視野の内省的な思念も展開された、大変優れた芸術性を持つ詩集です。高炯烈さんの略歴については、詩集の末尾にありますのでご覧下さい。韓国の詩世界の重要な人物であるだけでなく、アジア全般の若い詩人を韓国の読者に紹介するなどのお仕事もされてきました。文学賞も数々受賞されています。

それでは高炯烈さんと李美子さんよろしく願いいたします。

記念講演②

高炯烈「東京で小さな“アサガオ”を発音するとき

—韓日詩人のアジアにおける役割—」 通訳 李美子

アンニョンハシムニカ、高炯烈です。

（拍手）

感慨深いです。港敦子さんと娘さんの港鼓さんの歓迎に言葉では表現出来ない感動をいただきました。元現代詩人会会長、菊田守先生の先ほどのお話には、生きるということの感動がありました。韓国で石川逸子さんの詩集を読んだことがありますけれども、とても感動しました。私たちの死を直視して、人間の戦争の悲劇の話だと思います。韓国にも針で死を悲しむ詩があります。老いたおばさんが、若い頃に持ってきた針で何度も何度も縫い物をするので、その針が新しい布になかなか通らなくなった、というような内容だったと思います。針というのはその人の持っている時間であり、命である。石川逸子さんの話をお聞きしながら、たとえそれが命のないものであっても、そのものに命を与えるのが詩ではないか。四年前に広島に行きまして、宮島に行きました。そこで一緒なのが長津功三良さん、鈴木比佐雄さん、李美子さんでした。そこで見た木の枝に結ばれていた白い小さな布のことを想って、この『アジア詩行』が始まったのです。私は詩を書きながら、様々な難しい問題にぶつかりました。人間の生きづらさというものについて考える、そういう問題がこの『アジア詩行』の中にもうかがえます。いつも中心に人間を置くのではなくて、私の考えは、もう少しずらして、はずして、ほかの生きもの、ほかのものを置くかどうかだと思うのです。

金浦空港を出発する前、尹東柱詩人のことが思い浮かびましたが、宮沢賢治を追慕した鈴木比佐雄詩人の詩「花巻豊沢川をこえて」の中の「朝の霧のなか／花巻駅から一時間かけて／懐かしい豊沢橋をわたり／羅維地人協会のあった地で／「雨にも負けず」の詩碑にむかう」（『詩評』二〇〇九年夏号『おんどり』）のあの豊沢を思いました。

私は、二〇〇七年から「COAL SACK」に「アジア詩行」を連載するようになり、この九月、『アジア詩行—今朝はウラジオストクで』を刊行しました。一、二篇を除いては韓国の文芸誌に発表したことのない新作です。愛は偶然、路上で出会うもの、というシェイクスピアの言葉のように、特別な目的もなく文明的自我を解体したままで、気ままな旅を通して得られた穏やかな詩想がこめられた作品です。私は見知らぬ旅人となったとき、かれらの世界に入って行きました。

ここで少しの間、私が尊敬する詩人のために弁明をひとつ述べたいと思います。本詩集の一五八頁の佐川亜紀詩人にささげた詩「あなたのくにの朝顔」の中で、「ぼくらの祖先を見下げないで」とは佐川亜紀詩人に対してのことばではないことを明らかにしたいのです。この詩の話者は詩人である「わたし」ではなく、東京の街なかに佇むある韓国の旅人であり、話者とともに知らぬ間につぶやいている亡霊の歴史なのです。佐川亜紀詩人に私がささげ得るうつくしい、そして思いの込められた詩のつもりでした。その「花」は表現するには難しい微細な心理、空っぽなところに相当する「何か」であります。「アサガオ」を発音してみます。私の作品ですが、そこには私も知らない何かの宿題があるのではないかと考えてもみるのです。

二三〇年前、顔回が孔子を訪れて衛の国の暴君に会いたいと言うと、自分自身の心斎を探せと忠告をします。そうして人のことばを耳でも心でも聞いてはならない、気によって聞けと言います。

「虚室生白」の中に登場する場面です。空っぽの陽ざしでいっぱい部屋のことです。それは即ち、本来のこころの世界であり花の中の朝に似ています。

韓国の文学と社会科学では、十数年前に混血とハイブリッドに関する論議を経て、最近は、多文化国家、複合国家についてよく話が交わされます。顔回が他国に関心をいだいたのはけっきょく、多文化複合社会へ向かう最初のひとつの道筋だったのでしょうか。多文化複合社会は同族同士だけで壁をめぐらし暮すのではなく、壁と境界を崩し入って行くとともに暮らすようにとの文化の叡智だと思います。そのとき、こころを空けるということは言語の境界を越え、故郷を離れ越境する、他者と魂と血を混入する人類学的な複合の意味が秘められているはずです。

一本のロウソクの炎だけを凝視すれば、周辺のものたちはまじに消えてしまいます。多少の意識が低く鮮明ではなくても、眼をうすく開けてすべてをともにながめながら、ロウソクを見たかったのです。そうするときのみ、その内にある自在な存在と表情がうかがえられると考えました。そうしないなら、周辺で疎外され隠された存在は消えてしまったでしょう。これはダライ・ラマの最初歩段階での意識のひとつの悟りの方法です。私たちは民族的で伝統的なことよりもっと魅力ある辺境と異郷を引き寄せています。かれらは私たちをより新しくしてくれるからです。

これからより広く遠いアジアへの旅をつづけたいと願います。アジアが私の言語の国であることを知りたいのです。そこを訪ねたとき、私の中の「彼」は彼の中の「私」の生の前を通り過ぎていたのです。私たちはアジア、即ち日が昇るところの人々なのです。清潔で明るくそして純粋な世界がそれらの魂に込められているでしょう。特に、うつくしい宮島のユドファ（柳桃花＝夾竹桃）の木の枝に結んだりボンのような白い小さな布から、これらの詩は始められたのですが、カンボジアのトンレサップ湖に帰郷する夫婦のすがたは忘れられません。暮れてゆく夕闇の中の夫婦にしてあげられることは何もないのだと知ったとき、私の身体の虚室生白の中で何かがしきりに揺れ動いてはぶつかり合うのを感じました。それは粒子ではなくて波長なのでしょうか。真実なものは漠然としたもののようです。かれら夫婦が山の後ろの湖水に消え去ったとき、夜の虚しさのようなものをおぼえました。

ひとを深めるものとして無常感と絶望感があります。勝利者でないものたちの叙事と歌が文学であるとするなら、このことばは文学をするものにとってもっとも魅力的であるようです。あのひとは私ではないことを洞察するとき、暗い夜がそこに浮かんでいました。それはあまりにも小さくて疎通不可能なプランクの長さ(Plank Length)、10にマイナス33自乗cmほどの存在の境界なのかもしれません。アジアを旅して受けたいばんだ大きな贈り物はアジアのうつくしさと希望です。フランスの作家サルトル

は、他者は地獄であると言いましたが、目新しい地域ごとに他者はすっかり空のところに光のように
通り過ぎたのですが、その嗚咽に光の衣を着せたいと思いました。詩人の最高の喜びはその光を
捉えメタファー（隠喩）をつくり、省略し離れ去ることなのですが、懐かしさとの足りなさだけがのこ
りました。それでも旅の中で、私はもうひとつ別の絶望と限界のうつくしい光の束を見るには見たのでし
た。

十年前、アジアの若い詩人たちとともに「詩評」を創刊して今日までつづけてきました。二〇〇〇年に
日本から帰国して、アジアの詩人たちがひとつに出合う同人誌をつくってみよう、あまり実現の可能
性はないかもしれないとも思いました。創刊後、金泰成教授が中国方面を、韓成禮氏が日本を、ペイ
ヤンス教授がベトナムを、ウランバートルのイアンナ教授がモンゴルを担当して翻訳問題は解決され
ました。昨年の夏、通巻四十号を迎えたときに統計をとると、アジア十二カ国の二四七人の詩人の作
品が紹介されたんですね。そのうち、日本の詩人がいちばん多かったのです。

一九一九年二月の真冬、韓国の留学生の金東人、朱曜翰たちによって、東京で同人誌「創造」が創
刊されました。妙なことに、韓国の現代文学は韓国で始まったのではなく、日本の東京にある下宿部
屋から始まったのです。日帝時代、韓国の詩人たちのほとんどは日本で勉強し文学を始めました。
ところが一九六〇年から、韓国は次第に日本の文学とは距離をおいて西欧へと向かい始めますが、
そのときから日本との文学交流は疎遠になります。なぜ近い国が文学的に次第に遠くなったのだろ
う、その理由は何だったのか、私たちはこれから考えなくてはならないと思います。特に、脱西欧的
な考えが求められ、アジア的価値が求められる二十一世紀に、論じ合わなくてはならない重要な話
題のひとつでしょう。

「詩評」はアジア地域を固有な領域と定め、その文学を主体にする多文化国家時代のアジアの同人
誌だといえます。本多寿詩人に日本でも韓国、中国、モンゴルなどの若い詩人と協議して、東アジア
の詩全体を含めた日本語版の詩誌をつくってみてはどうか、と話したことがあります、それは容易
なことではないようです。

これまで「詩評」に紹介された日本の詩人たちの作品は非常に高い水準のものだと思います。最近、
韓国の読者も日本の現代詩人を少しずつ知るようになり、また関心も寄せています。松岡正則など
のH氏賞の受賞詩人、小池昌代、河津聖恵をはじめ若い女性詩人、崔華國、金時鐘、趙南哲、李美
子、崔龍源といった在日僑胞詩人の特集号など、記憶に新しいです。私はいまも「詩評」を直接に校
正をしていますが、日本の詩を読むとしあわせをおぼえ、詩人たちに会ってお茶や酒盃を交わしなが
ら文学を語りたくります。多くの紙面を割愛して作品をより多く載せたいとも願います。私にできる
日本の詩人たちへのささやかな仕事と思っています。

とはいっても、収益の上がりようのない専門詩誌をつくるというのは、資本主義市場においては困難
なことであります。二七〇を数える文学関連雑誌がある韓国でも、未来は日本のように同人誌で文
学をやるという時代が来るだろう、と憂慮する声を耳にします。特別な代案があるわけではないけれ
ど、詩は詩の主人である詩人たちが生かして行かなくてはならない、と私は言いたいのです。謄写版
で詩を発表し、一行の詩のために夜をあかした十代後半の文青時代を懐かしく思います。紙面がな
ければ詩人は文学にたいしての自らを守ることができない。反資本主義的な様式と存在がまだのこ
っているとしたら、それはおそらく詩とそれをあくまでも書きつづける詩人でありましょう。誰かが助け
てくれなくとも、すすんで費用を集め詩集を編纂し、同人誌を発行することを生きる喜びにするので
す。実際、一九六〇年代以前だけでも、韓国の詩人たちはみんな自費で詩集を刊行したのでした。
きょう一日、パンを食べられなくても一篇の詩が読みたいと願った、戦後の飢えた心を抱いた、それ
でいて、より優れた詩を書いていた、かつての詩人たちを羨ましく思います。

韓国と日本の詩人の役割の第一義は、自らの産室での熱情的な詩作であり、第二には積極的な相
互協力であります。自国の詩を超えてアジアの詩を編集することが重要だと思います。そのために必
ずなくてはならない器（うつわ、入れもの）がありますが、それが、即ち前にもお話しました詩誌なので
す。その詩誌という器は招請の場でもあります。その器に招かれ私の詩が多くの人々の編集と組
版、校正とフィルム 晒板、そして印刷と製本を経て、出来上がった詩誌を郵便物とし受け取るとき、
胸がわくわくしたのを昨日のことのよう記憶しています。

来る十二月二日から六日まで、ソウルと東草などで「詩評」の“アジア詩を愛する詩人たち(The Poetry Society Asia)”。主催で、東南アジア八カ国の詩人十五名を招待して文学の祝典を開催します。一回性の行事に終わらないように彼らの作品をこれからも「詩評」につづけて紹介するつもりです。インドネシア、マレーシア、フィリピンなどのめったに出会えないような赤道近くの異国の詩人たちに出会えると想うと、胸が弾みます。アジアの多様な作品と人的交流は、特に、韓日ふたつの国の詩人たちが夢に思い描き、またそう為されなくてはならないこと、と私は思ったりします。

実際に、恐るべき広島原爆投下の惨状を描いた長詩『リトルボーイ』もまた同じような脈絡から刊行されたのですが、「COAL SACK」社から企画され、刊行された『Against Nuclear Weapons』『鎮魂詩四〇四人集』など、反戦文学作品集を受け取り感動を抑えられませんでした。明らかにアジアにおいて「COAL SACK」社がなしえる文学出版の主題なのだと思います。軍備競争が強化される東アジアにおいて平和を求め、過去の歴史を警戒する深い意味がこめられた文学作品を重視することは、私たちみんなの傷痕を治癒し、新たに疎通する“アジアの途”。なのだと思います。ことばと途は異うけれど、アジアの平和と価値、そして深く遠い生の中にある固有な言語のうつくしさを探求する活気にあふれた途を、私たちはともに歩んでいます。

最後に、きれいな写真を詩集の表紙に提供して下さった柴田三吉詩人、そして4年間、私の詩をこつこつと翻訳してもらった李美子詩人、『アジア詩行』を刊行し、この席に招待して下さった「COAL SACK」の鈴木比佐雄・編集発行人に心から感謝します。

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございました。

詩の内容と一致する深いお話をしていただきました。詩を書くことと、ものごとを見つめる詩精神、詩文学の普及、といったところを奥まで踏み込んでお聞きました。日本で詩を書いている私たちは、市場流通的に悔しい思いをする現状があるわけですが、今の高炯烈さんのお話に大変勇気づけられました。アジアの若い詩人とも高炯烈さんは交流されていて、韓国と日本とアジアという視野のお話でした。みなさんのなかにも励まされた方が多いのではないのでしょうか。

これで第二部は終わりになります。

(休憩)

〈第三部 スピーチと詩の朗読〉

佐相憲一(司会) 第三部を始めたいと思います。第三部は『鎮魂詩四〇四人集』に参加されている方々にスピーチと詩の朗読をしていただきます。

まずは、岩手県北上から来ていただきました斎藤彰吾さんです。詩誌「堅香子」「新現代詩」などに優れた現代詩を発表されているほか、北上の郷土新聞に長く優れた評論なども発表されてきました。古代先住民も含めて、北上の文化を心から愛し、現代を見つめる批評軸とする、大変優れた評論集を現在準備されています。斎藤彰吾さん、よろしくお願いします。

斎藤彰吾 斎藤彰吾です。先ほどの高炯烈さんの韓国語の響きが大変快くて美しいなあと思いました。私の住んでいる岩手県の八百年前、平泉を築いた藤原清衡が中尊寺を建てる時に、いわゆる建立願文というのがありまして、古代の戦争の前九年の役、後三年の役、そこで戦って死んだ官軍、蝦夷(えみし)の末流たち、魚や貝の生きもの、を供養するために鐘を造り鐘を敲いて、四方八方に広げようと、そういう清衡の供養願文がございます。今度の鎮魂詩集はそういう命を継いだすばらしい詩集じゃないかと思っています。私の詩と朝倉宏哉さんの詩を読ませて下さい。

雨の中のバラ 斎藤彰吾

冷めたい雨の中／二つ目のバラが咲いている。／冬近いねずみいろの空に／ピンクが浮び／そこに茶けてしおれた大輪が／首のように傾いている。／／青い傘さして／ハガキの投函に行く／コンビニエンスストアまで。／信号のある角の空き地では／マンションの基礎工事がはじまっている／すこし前／ここには老いた母が住む一軒家があった。／／雨の降る今時分／長い間行方不明だった一人息子が／警察のパトカーに乗せられ／六十男の死体になって帰ってきた。／川向うの山林で／何日か ひっそりと自活していたのだという。／／出世とか誇りとかをさっぱり捨てて／一緒に住めば一番の幸福ではなかったか／拝みながら思った。／／ネクタイなど付けなくていい／一つのからだか御免／お袋よ／「ただ今」と帰ってくればよかったのに／／生れたふるさとに戻りながら／なぜか山ごもりした男よ／ふくろうの鳴き声を聞いたか／差し交わす木々の枝の間から／町の明りが見えたらう／お袋のいるあたりの明りも見えただろう／／氷雨降る灰色の日に／バラが一輪咲いている。

吼えている山 朝倉宏哉

この乳房のような小山の頂に立ち／百年前の日本とロシアの戦争を想像できるか／この山の争奪のために繰り返された戦闘で／死傷した何万人もの兵士のころを共有できるか／／まず 遼東半島の先端の緑の山を百年前の禿山にせよ／眼下の旅順港を大軍港にしてロシアの軍艦を集結させよ／この山もあの山もその山も／鉄とコンクリートで要塞化し縦横に塹壕をめぐらし／大砲を据え銃を構えて／国と国とのエゴを突出させよ／／満州と朝鮮の覇権を日本とロシアが争うという不合理／他国を戦場にして他国同士が戦争をするという不条理／不合理と不条理をそれぞれの国の正義として／国を挙げて戦った日露戦争／／総攻撃 斜面を這いのぼる日本の軍団／突撃隊 決死隊 白襪隊 みな若い命の群れ／炸裂する砲弾 浴びる銃撃 噴き出る鮮血 飛び散る肉片／一人ひとりの雄叫びも断末魔もむなく消えて／標高二〇三メートルの山が両軍兵士の屍で覆われる／／これほどの惨劇を経て人間は戦争をやめない／日本もロシアもあれから新たな戦争の世紀を送った／死んだ兵士たちの恨みは晴れない／今 二〇三高地に黄砂を孕んだ風が吹く／百年前の戦死者の声が敵味方ひとつになって／われらの死を無駄にするな！ と／びゅうびゅうびゅうびゅう／山全体が吼えている

(拍手)

佐相憲一(司会) 斎藤彰吾さん、ありがとうございます。今斎藤さんが読んで下さいました朝倉宏哉さんは、今日見えておりますのでご紹介します。あちらが朝倉宏哉さんです。(拍手)。朝倉さんは九月に行われました鳴海英吉研究会で貴重なスピーチと朗読をして下さいました。

それでは次はやはり岩手県の盛岡から来て下さいました、森三紗さんです。森三紗さんのお父様は宮沢賢治の友人の森荘巳池さんです。現在、国際啄木学会で講演されたり、貴重な資料で宮沢賢治を論じたり、全国でまた世界でご活躍されています。今日ははるばるありがとうございます。森三紗さん、よろしくお願いします。

森三紗 みなさんこんにちは。この前、国際ペン大会というのが東京で開かれまして、先ほど高炯烈さんがお話されましたように、日本はこれからもっととアジアと連帯していかなければいけない、と痛感し泣きながら聞いた詩があります。それはベトナムの詩人です。アメリカに亡命された方なんですけれども、「ベトナムの幼い娼婦たち」という詩を朗読されました。泣きながら朗読されました。出だしだけお伝えすると「幼いベトナムの娼婦たち まだ八つと九つと十なのに ……」の仕方を知っているユムユム でも グムグムはだめ 一回三十ドル」というふうにしてずっと始まっていくのです。その詩を私は聞いてですね、アジアの子どもたち、幼い子どもたちの人権が貧しさのためにじゅうりんされている、ということを実感したわけです。宮沢賢治は「世界の全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という農民芸術概論綱要を残しています。農民がその当時は小作人と地主という大変な差別の中に虐げられていた時代でした。それを背景にして「農民にも芸術があるべきだ」踊りだとか歌だとか演劇だとかがなければならないということを言っていたんですが、その農民と言うのは、ア

ジアの人々に置き換えてもいいんじゃないかと私は思います。あまりにも酷い格差が無いのかどうなのか。

今日は宮静枝さんの詩と私の詩を読みます。宮静枝さんは私の尊敬する大詩人であります。去年の五月に十冊の詩集『反戦平和の詩人』と岩手県では言われていますが、私ども斎藤彰吾さんなども編集委員会を立ち上げまして、精選して良い詩集を作りました。宮静枝さんの「特攻花」という作品を読ませていただきます。深い深い人々への愛と平和を望むところが読むたびに響いてくるのです。

特攻花(とつこうばな) 宮静枝

その花のことを／島の人たちは特攻花と呼んだ／／かなしい花ならいくつか知っている／弟切草(おとぎりそう)／最愛の弟を誤解から切つてしまった／その墓場に咲き出た花／御赦免花(ごしやめんばな)／流人の島にその花の咲くとき／一年に一度の御赦免船が来る／花水(はなみず)木(き)／殉教者はりつけの十字架に切られ／永遠のとがを泣く木 など／／特攻花の名は痛い／南方の離島徳之島の特攻基地／息子たちは／日本の深い罪を肩に／恩愛を背にして／還らない約束で南溟の深い天を征くとき／地上との思い切りのため／機上から別れの花束を投げ落とした／花束から種子がこぼれて咲いた／矢草に似たつましい花を／島の人たちは思いをこめて特攻花と呼んだ／／けむるのように遠くなつてゆく物語り／昔 むかし 太平洋戦争があつて／これが還らなかつた息子たちの花なのだ／語りつがれてゆくだろう特攻花／花がそのあかしを咲きつづける限り

十字の喪章 宮静枝

あふれるその色を／両手にすくって うしろ姿にかける／／だまって征った兵隊の群れ／ふり返らなかったその群れに／菜の花は十字の喪章

水の中の兵隊 宮静枝

菜の花は／川辺にそつて咲いていたので／水の中の／水の中の兵隊は／菜の花を踏んで歩いて征つた／南を指して歩いて征つた／／足音は いまでもきこえる

還らぬ銃 宮静枝

菜の花畑を征つた／かついだ銃に／千万の菜の花が／うこん色にかがやいた／／それっきり銃は還つてこない

軍 馬 宮静枝

四つ足が白く／額に白い星をはりつけた／男らしい馬だ／体から湯気がたつて／びつしり花びらがついている／眸にも菜の花がゆれていた／／あしたは戦場に征くという

沓い花 宮静枝

そのことについてはたれも語らなかつた／／たれもが菜の花畑を征つたので／たれもが心に菜の花を抱いた／語れば消えてしまいそうで／たれもがそのことを語らなかつた／そのことを語らないまま／男たちは死んでしまった／だから／今も男たちは／菜の花を抱きつづけているにちがいない

次は私の詩を朗読させていただきます。宮静枝さんは戦跡巡礼をやっておられました。それで私のことを三紗ちゃんとかわいがってもらいました。知覧の特攻の跡を「私は行けなかつたけれども、三紗ちゃん行ってきてね」というのが私への遺言だったのです。

嗚 咽 森三紗

カンナの花が夏の名残りを咲かせている／燃える血のように／今はもうしたたりはしない十一月なのに／石の燈籠が並んで死者を慰める／知覧平和公園まで／来るものを迎えるように／無垢な二歳の私の手をひいて／遺言で託されてわたしが初めて訪れた地に／特攻機とともに／その時飛び立たなければならない／若者たちがいた／二度と戻れない／片道だけの／沖縄までの燃料を積載して／旅立と呼べるのか／見送る人々の切ない視線を後にして／（母よ 母よ 妹よ 妹よ 吾子よ 吾子よ）／遺書をしたため 別れの盃を交わした／三角兵舎の前になると／子供の私は怖いから入るのは嫌だという／確かに並んでいるのではないか頭蓋骨のように／鉄カブトが／五個／最後の飯をたい飯ごうが七個／きちんと折りたたんだシーツと枕カバー／（敵から見えないように三角屋根の兵舎が／建てられていたのだ）／聴こえるはずがないのに／誰かの嗚咽が聞こえる／それは仲間には知られたくないのに／我慢しても 我慢しても泣けてくる／母への 子への 故郷への 追憶の声／飛び立つ前に泣かなければならない無念さ／静謐な兵舎のどこからか／わたしはきいたのだ／その嗚咽を

あどけなく笑って 森三紗

特攻記念館のなかで／写真のなかから笑い声が聞こえる／少年兵たちが笑っている／子犬を抱いて／「可愛い」「可愛いね」と 微笑み 笑っている／少年兵の君は／あまりにも若い／飛行兵の君は／十七歳だったという／取り囲んで犬を抱く仲間たちと／共有する時間／十八歳の君たちも取り囲んでいる／ああ あまりにもあどけなく笑っている／子犬は君たちにぬくもりを／最後の微笑を贈っている／この世に在った若者たちに／無残にも散った／沖縄の海戦の／大あらしを前にして／なぜ書いたであろう轟沈と／必沈と／学徒動員の大学生の君たちも／なぜ書かなければならなかったろう／敵艦に命中する運命を抱えて激突していった／その前にすら／はかなく散った機の十代もいた／夏のような青い空／私が 二歳の私とともに／今鳴らした平和の鐘は／彼らに聞こえたのであろうか／届いたのであろうか／二歳の私とともに／私はこの梵鐘をならし続け／祈り続けていくのだ／はかない晩秋に／この世にあるかぎり

（拍手）

佐相憲一（司会） 森三紗さん、ありがとうございます。

斎藤彰吾さん、森三紗さんと、はるばる岩手県から来ていただきましたけれども、今度は西の方にいきましょう。岡山県は総社市から来ていただきました、くにさだきみさんです。くにさだきみさんは、今週全国に出回りました大変優れた詩論集『しなやかな抵抗の詩想』が今話題になっていて、もしかしたら今日、日本で最も注目されている女性詩人といえるかも知れません。今年の初めにはこれまでにたくさんの詩集をまとめた『くにさだきみ詩選集』も刊行されています。詩人会議や個人誌「径」などでご活躍です。壺井繁治賞、富田碎花賞を受賞されています。くにさだきみさんよろしく願います。

くにさだきみ こんにちは。岡山県総社市から参りましたくにさだきみと申します。私は昭和七年生まれです。太平洋戦争と一緒に大きくなったようなそういう世代ですから、兵隊にとられた若い軍人の母親の嘆きや、あるいは戦災、近くに広島がありますので、原爆を受けた人の家族のつらさなどを身にしみて味わって大きくなりました。ただ私は戦争をまったく知りませんので、いろんな資料をもとにしたらしながら、今まで書いてきたんですけれども、実は戦争が終わっても朝鮮戦争がありました、ベトナム戦争もありました、イランイラクの戦争もありました、というように世界は平和になりませんでした。どんどん世界中に戦争の悲劇を追いかけてながら、書いていたんですけれども。悲劇は足元から起きました。二〇〇五年の六月、私の息子が自殺をいたしました。その経過についてはあちこちに書きましたので、ここでは触れませんけれども、実は戦争とか原爆とかこういうものさえ無ければ、自分の息子や、息子の世代が死ぬようなことは起きないと思っておりまして、ところが今の社会は自殺する人が年間三万人もいます。それだけでなく、誰かに殺された、誰かを殺したというような話が、あちこちで起こっております。そういうことで私は新しい課題といえますか、今度は自分の息子の死について書かざるを得ない立場になって、今回のこの鎮魂詩集にも長く書き続けてきた戦争についてのことを書きたいと思ったんですけれども、もう身につまされて息子のことから始めました。「静かな朝」という作品で息子の自殺から一年経った話を載せています。今日は掟やぶりなんです、この詩ではなく、さらにあとに書いた「静かとは青く争うこと」という詩を読ませていただきます。

〈静(しずか)〉とは 青く争うこと くにさだきみ

〈静〉とは 青く争うこと。／海や空のように／あるいは 山のように――／お伽話も寝物語りも／夢の中味も／(カチカチ山だったりサルカニ合戦だったりモモタロウだったり)／くりかえしくりかえし夜明けまで 毎夜／争いごとは続いてきたと思うのだけれど――／朝は／(死体みたいなベッドをひとつ残して)／青く／しらじらとどこまでも静かであった。／／静かだから眠れるというのは嘘である。／静かだから 平穏ではない。／平和でもない。／音もなく卵を割ることで／今朝の食事は始まっているのだ。／／10月26日／アイスクリーム店を退店したまま／平岡郁というひととは(行方不明になってそのままだったが)／11月6日に頭部が／7日に大腿骨 8日には胴体 9日になって足首が――そして

今朝(11月20日)／同じ臥龍山(がりゆうざん)の別の場所から／足の爪1枚と爪の破片4つが見つかる。／／その間―／(平岡という女性の行方を追って)／臥龍山の紅葉は／山頂付近から／徐徐に麓の方へと拡がっていったのだが、／ルミノール反応の検査や／DNA鑑定が繰り返されただけで／／今朝―／朝刊に載る臥龍山は(雪を被っていて)青く／しらじらとして静かであった。／／〈静〉とは 青く争うこと／あの山のように／あるいは 海のように川のように―／／四年前の六月一日／ちぎ・けんいちの自殺した朝も／朝刊は／新緑の山と(山を流れる)／溪流の写真を載せていたりして／(樹木と樹木／水と水とが 青く争い／限りなく深く静かな 風景だった。／／音もなく卵を割ることで、／ちぎ・けんいちの／朝の支度も始まったのだろうか。／ダイニングのテーブルに／いつものように置かれていた朔日(ついたち)の新聞／車の鍵(キー)と定期入れ。財布。／いつもの静かな朝だったのだ。／／静かだから眠れたという日は なかったはず／静かだったから 平穏だったりもしないのである。／静かな朝が―／(ちぎ・けんいちの)／平和な朝にはならなかった。／／お伽話も寝物語りも／夢も 未来も 空想も―／(カチカチ山だったりサルカニ合戦だったりモモタロウだったりアトムだったりして)／―だれがだれに殺されたのか／―だれがだれを殺したのか／―だれが ？／殺したものを 青い闇へと捨てたのだったか。／くりかえしくりかえし 夜明けまでわたしも争いの／青の深さを問うのであったが―／／朝はすでに／卵みたいに潰されている。／(ベッドみたいな眠らないもの。／頭やら 足やら 胴体やら 爪やら／同じDNAの幾つもの破片と その抗(あらが)い。)／／あらためて／〈静(しずか)〉とは 青く争うこと／／海も川も／あるいは 山も―空さえも／今朝は嘘みたいに静かで(争う青い塊のまま)／硬く目を閉ざし／死人の貌で 蹲る。

(拍手)

佐相憲一(司会) くにさだきみさん、ありがとうございました。

次は大阪から来て下さいました下村和子さんです。詩集『弱さという特性』『手妻』など多数出されていて、今年はエッセイ集『遊びへんろ』を刊行されました。詩誌「叢生」や文芸誌「原石」、日本文藝家協会などでご活躍です。下村さんは演劇の世界でも活躍されてきた、朗読のプロです。下村和子さん、よろしくお願いします。

下村和子 みなさんこんにちは。下村和子でございます。

今回の鎮魂詩という企画はとてもいい企画だったと私は思います。鎮魂というのは祈りですからね、私たちは本当に祈りというのは人間の行為の中で、一番純粹であって美しい行為だと思っております。

刺繍曼荼羅 下村和子

あなたは誰でもが持っている一番小さな道具を選んだ 母から受け継いだ細い一本の針 その針の目に心を縫い合わせて鎮魂の糸を通す あなたの座る山寺の奥座敷は静かだが あなたの時は 大陸の荒野で焦げついたままだ 一針一針 大陸で見てしまった修羅を浄化する 公園や街角に転がっていた人間の誇りを剥ぎとられた物体の声を縫う

あなたはそのひとつひとつを拾おうとした あなたは美しい曼荼羅にしたいと希った だがひと握りの金と引き換えに売られ 手を引かれていながら親を振り返る それでも一言も発しなかった女の子の眼は何色の糸で刺せばよいのか

繰り返す四季をあなたは刺繍仏ひとすじに生きたが 時に舞いこむ揚羽蝶や 北に帰る鳥風に誘われて散る桜のひとひらは あなたの歩調を少しゆるめ 生き残った者と死んだ者との距離を拡げた 記憶にはゆっくりと紗の幕が下りていた

選ばれた者の哀れよ あなたはその大願成就のために 人の恐れる病(やまい)を課せられた 苦しみを描く者は その肉体に直に痛みを受けねばならなかった あなたはそれを仏の意志と受け取っ

た 震える声であなたは言った

—ありがとうございます

助けを求める手も 差し出す観音の手も 赤でしか描きようがない あなたは自分の血で糸を染め曼荼羅を仕上げた 七十一歳で他界

あなたを焼く炎は驚く程汚れていた 空は雷雨の前触れのように暗くなり 煙は終日絶えなかった

ああ、しかし並べられたあなたの刺繍仏は その煙の媒染を受け 薄桃色に和らいでいった

(拍手)

佐相憲一(司会) 下村和子さん、ありがとうございました。

続きまして、静岡県の三島から来ていただきました大井康暢さんです。最近『大井康暢作品集』というこれまでの集大成シリーズを続々と刊行されています。それを読みますと、お仕事が終わって帰宅されて夕食をとられたあと、日々机に向ってひたむきに現代詩研究の執筆をされてきたお姿が見えるようで、本当に貴重な論者と思います。詩誌「岩礁」を長年主宰されてきました。大井康暢さん、よろしく願います。

大井康暢 私も戦争で何人もの死を見ましたし、自分も体験しました。私のすぐそばをアメリカの空母から発進した戦闘機が機銃掃射するんですよ、私の五・六メートル先をタタタタタと土煙を上げながら弾が通っていくんです。私は九死に一生を得たわけですが、その同じ日に飛行場でのごとでして、先輩が一人直撃の機銃掃射を受けて亡くなりました。私は浜松にいたんですが、B29の空襲に遭いまして、真赤に燃え上がる中を、自分の家の屋根に焼夷弾が落ちるんです、それを消すためにいこと一緒に屋根に登って、たたき消しながら逃げ降りてきたということもあります。駅近辺は全部焼けて、大変な煙と炎で燃えさかる中に悲鳴のような異様な声が聞こえるんですよ。あんな悲惨な経験は二度としたくありません。

飛行場へ行きますと、数十機の戦闘機が並びまして、エンジンをフル回転で轟音をたてていました。若い一人の兵士が近寄ってきまして、年は二十二、三でしたかね、白いマフラーを首から巻きましてね、プロペラがゴーンと音を立てて回っているんで、風が私のそばを吹きますから、白いマフラーがヒラヒラするんですよ。悲しそうな顔はしていませんでしたけれども、笑顔でいろいろ話をしましたが、暮れなずむ浜松飛行場のですね、夕闇の中に轟音が私の耳に今でも残っています。翌日行きましたら、もういないんです。私はその特攻隊の兵士の顔をはっきりとは覚えていませんが、表情全体を今でも覚えています。

私は静岡県の詩人会に属していますけれども、もう亡くなりましたけれども、高橋喜久晴さんという、大変優れた方がおいでになりました。非常に高い理想と広い見識を持ちまして、静岡県の詩を牽引して下さった方ですが、その方の追悼の詩を読ませていただきます。

たましいよ、天に還れ—高橋喜久晴に 大井康暢

詩人よ／彼はさ迷い歩いていた／乾いたのどが引きつり／川原の砂を踏みしめてはよろめいた／土手の痩せた草むらを上り／天の城に手を伸ばした／なんと長い間地上を彷徨い歩いたろう／いま歩きつかれて／やっとたどり着いた向こう岸に立ち／朝焼けの中に浮かびあがる／窪んだ眼とこけた頬／笑った目元ははげしくイデーを求め／一点を凝視している／涸れた細い流れが泥のように光り／曇った空には高い鐘楼がそびえ／褐色の枯れた小麦畑が続いている／カケスの鳴き声が静寂を破る／黒い羽に白い斑模様鮮やかだ／カケスの高い声が空気を震わし／巣の中の叫びが耳に痛い／彼の孤独な影の前に／広大な馬鈴薯畑が広がっている／かすかな呼び声を振り切り／一人で霧の中から逃げてきたのに／別れて来た人たちの思い／夜着のぬくもりに絶ちがたい未練が残る／固い鎧のような心の／空しい絶望をよく知っていたから／疲れた肉体を労わるように／ボブラ並木の川岸で／カケスの乾いた鳴き声がする／風が起こり／砂塵が天に舞って行く／愛妻と二人／嘆き

の壁の前でこちらを見ている／詩人よ／あなたの声は神の声だった

(拍手)

佐相憲一(司会)

大井康暢さん、ありがとうございました。

続きまして、やはり静岡県浜松から来て下さいました、埋田昇二さんです。埋田さんはアフガニスタンの戦争をずばり書かれた詩で参加されているのですが、この「アフガンを緑の大地に」は合唱組曲になっていて、それがCDになっています。今日はスピーチのあとに、朗読の代わりにこのCDをみなさんに聞いていただきます。埋田さんは詩誌「鹿」、文学誌「青い花」などでご活躍です。では埋田昇二さん、よろしくお願いします。

埋田昇二 歌の前に少しコメントしたいと思います。ご存知の通り、今この瞬間もおそらくアフガンでは無数の罪の無い子どもたちが殺されています。「テロ撲滅」を口実に戦火が続いています。アフガニスタンの人たちが願っているのは、なにより平和でありパンです。アフガンというのはかつてソ連軍が侵攻したこともありますので、もう二十年以上にわたって戦火が続いています。荒れた農地、産業、教育、何もかもが無くて、そういう中で今もアフガンの人たちは暮らしています。アフガンというのは、軍事力では解決できないと明らかになっていますが、そういう中で日本のNGOペシャワール会の人たちが、アフガンに行っていてですね、アフガンの人たちに掘削事業とか農業指導とかそういうことをやっています。そのペシャワール会に参加した、伊藤和也さんという方がテログループと呼ばれる人たちに襲われて殺されました。二〇〇八年の八月二十六日です。三十一歳という若さでありました。この曲はアフガンで亡くなった伊藤和也さんを追悼して書きました。

私は合唱曲の詞もたくさん書いていますけれども、合唱曲の歌詞の作り方と、ポエム詩の作り方というのは、同じような言葉を使いながら、基本的なところで違っていると、私はかなり厳密に区別して書いています。というのはですね、歌詞というのははじめから主題が決まっているんですね、ところが詩というのははじめから主題ありきではないんですね。あくまでまあ比喩的にいうと、天から降ってくる、そして語られるのが詩だと思います。言葉を使いますが、書き方としてはかなり違うんだと思っています。しかしこの曲「アフガンを緑の大地に」は詩としても書いたものがわりと素直に合唱曲になったということです。作曲は山本治彦さんというNHKのアニメなども作曲されているプロの作曲家の方です。歌は静岡のうたごえ合唱団の方です。

合唱組曲

アフガンを緑の大地に アフガンの星となった伊藤和也さん を追悼して

作詞 埋田昇二 作曲 山本治彦

1

アフガンの天空から降りてくる／雪解け水よ／とうとうとあふれる水の路で／砂漠を緑の大地に変えよう／こころざしなかばで銃弾に倒れた／きみの声が／今も溪谷になりひびくとき／村人たちは希望と夢と／アフガンの平和な未来を語るだろう

2

手のひらからこぼれる／よみがえる肥沃の土よ／旱魃や雪雹とたたかいながら／きみが育てたお茶の木や／さつまいもの苗／ついには幻の葡萄まで／ゆさゆさと たわわに稔るとき／村人たちはきみの面影と／アフガンの稔(みのり)の未来を語るだろう

3

村人たちは／祈りをこめて／とつとつと語りだす／欲しいのは／銃でなく／水とパンです／欲しいのは／欲しいのは／いちめんの菜の花畑を駆けてゆく／こどもたちの黒い瞳と笑顔です／おなか

っばい食べられる／にぎやかな収穫祭／アフガンを緑の大地に／きみの声が いまもなりひびく
／村人たちは 希望と夢と／アフガンの平和な未来を語るだろう／アフガンの稔(みのり)の未来を語
るだろう／アフガンは忘れない／きみの残した／たくさんの足跡(あしあと)を／足跡を

(拍手)

佐相憲一(司会) いい曲ですね。アフガンでたおれた日本のNGOの青年に埋田昇二さんが捧げた
合唱曲でした。「イエス・ウィ・キャン」の人にもこの曲を聴かせたいですね。(笑い)。ありがとうございます
ました。

次は東京在住の浅見洋子さんです。ニッポン放送テレホン人生相談回答者をされてきました。鎮魂
詩集には大変貴重な、水俣病関係の詩で参加されています。これまで東京大空襲なども詩に書かれ
てきました。日本詩人クラブなどでご活躍です。浅見洋子さん、よろしくお願いします。

浅見洋子 私水俣の詩の朗読を今日限りにしばらく休もうと思っております。今、ここに一枚の名刺
がございます。全国空襲被害者連絡協議会連絡委員・原田洋子、戸籍の名前に戻りまして、〇〇政
策のアシスト、それを練り合わせる国会議員の方たち、法制局の方たちとのアシスト、その状況を原
告の皆さんにお知らせするお手伝い、連絡係をしています。そして今、裁判には立ち上がったもの
の、いろいろなことを言えなかった皆さんの鎖を作りたいと、その連絡係をかって出ました。おそらく
今月中にはこの連絡協議会のホームページで公開出来ると思いますので、皆さんにもご協力をお願
いいたします。そしていつか、浅見洋子に戻って生きることの厳しさ、辛さ、素晴らしさ、そして皮膚感
覚の言葉で、平和の大事さを語りつづり、皆さんのお手元に届けられたらと願っております。ありが
うございます。

水俣のころ 浅見洋子

母は子を背負い 浜で カキ打ちをした／祖母は庭先で 魚を 料理した／水俣の地で くりかえされ
た 生活／／だが 村人たちは／異変に 気づいた／／—何があったと 猫が狂うと／おかしか
まっすぐ 歩けんとよ／／—おうお！ 血が出ると 切ったかね／痛くなから わかんもんね／／
打瀬の白帆を あやつり／祖父が 父が 漁をした海／漁師が わが子を 育てた海／／だが 漁師
たちは／異変に 気づいた／／—手がしびれて 綱が握れんと／あぶなか 海におちるもんね／／
—舟と舟が ぶつかりそうやった／不思議か どちらも見えんよったね／／あたりまえだった 生活
が 絶たれ／健康が家族が うばわれていった 日／／人びとは 原因を 知りたいと／チツソ水俣
工場に 詰めよった／／—知りたか どげんして／こない 身体に なりおったか／／—わしら なん
も 悪かことなど／しておらんとに どげんしてね／／原因を理由(わけ)を はっきりさせねば と／人
が あつまり 人は 立ちあがった／／綱を持つ手に チラシを にぎり／裁判での 決着を もとめ
ようと／拳をかかげ 闘いが はじまった／／生存権を生命権を 死守するための／水俣病の闘い
水俣病裁判／／—わしら なんも 悪かことなど／しておらんとに どげんしてね／／そばくな 疑問
からの 闘い／時は 流れ 四十八年が 経った／／生まれないうまに 散った 命／志なかばにし
て 散った 無念／／二〇〇四年十月十五日／最高裁判所は 判断を くだした／環境行政に 怠
慢あり と／／喜びに涙する わたしのなかを／黒い影が よぎった／身震いが ひとつ／／水俣病
の闘いに／終わりは あるのだろうか／／もの 言わぬ 自然の／もの 言えぬ 魂の／癒される日
は と／／見守りつづけねば／祈りつづけねば／水俣の地を 水俣の人たちを

(拍手)

佐相憲一(司会) 浅見洋子さん、貴重なお話と朗読をありがとうございました。

次は楊原泰子さんです。静岡生まれで千葉の柏にお住まいです。「コールサック」六七号をご覧にな
った方はご存知と思いますが、ユン・ドンジュの研究を新しい角度からされて、六七号に仮説として展

開されている交流のことなど、当時を知っている方や資料を探しておられます。今、ユン・ドンジュ研究に大変意欲的に取り組まれている注目の研究家の方です。鎮魂詩集への今回の詩もユン・ドンジュのことを書かれています。楊原さん、よろしくお願いします。

楊原泰子 楊原でございます。柏に住んでおります。実は公民館での韓国語の講座で鈴木比佐雄さんと机を並べていました。ユン・ドンジュについては先ほど石川逸子さんもお話されました。私たちの国が若い詩人の未来を奪ってしまいました。そのことがずっとところに引っ掛かっていて、贖罪の気持ちもあって、ユン・ドンジュの日本時代の調査を続けて参りました。もう十数年になります。先ほどご紹介いただきましたように、「コールサック」六七号にいろいろと書かせていただいておりますので、是非お読みいただいて、ご助言をいただければと思います。それと、ユン・ドンジュが逮捕されたときに押収されてしまった資料、蔵書とか、詩稿とか、日記とか、それらが見つかっておりません。それを探す小さな運動もしております。それと、立教大学の中で毎年二月にチャペルで追悼のつどいを行い、礼拝とか、日本語、韓国語、中国語、英語などいろいろな言葉で詩を朗読し、そのあと講演をおこなったり、というような活動もしております。今年から、ユン・ドンジュ奨学金というのが立教大学で始まり、ユン・ドンジュの後輩である韓国の学生たちのために奨学金が出ることになりました。今日はユン・ドンジュの詩と、キム・スヨンという詩人の詩を朗読させていただきます。キム・スヨンさんは軍事独裁政権下の韓国の民主化運動の精神的支えとなったと言われています。どちらも困難な時代に、良心をつらめき通す難しさというのを表現していると思います。今読んでも私たちの生き方を問われているような気がして、それを読ませていただきます。

恐ろしい時間 尹東柱(ユン・ドンジュ)

一九四一・二・七

そこで私を呼ぶのは 誰ですか、／／柏の葉が 碧く染める日陰だが、／私はまだここに 息が残っています。／／一度も手を挙げて見られなかった私を／手を挙げて示す天(そら)もない私を／／どこに私の身を寄せる天(そら)があつて／私を呼ぶのですか。／／務めを終え 私が逝く日の朝には／哀しみもせず 枯葉が散るだろうから……／／私を呼ばないで下さい。

「ある日 故宮を出ながら」 金洙暎(キム・スヨン)

一九五六・十一

なぜ私は些細なことにだけに憤るのか／あの王宮の代わりに 王宮の淫蕩の代わりに／50ウォンばかりのカルビが 脂身だけ出てきたと憤慨し／みみっちく憤り ソルロンタンの店の豚のような女主人に悪口を言い／みみっちく罵る／／一度として正々堂々と／捕らわれていった小説家のために／言論の自由を要求し ベトナム派兵に反対する／自由を履行できずに／30ウォンをもらいに 3回も4回も／訪ねてくる夜警達だけを憎み嫌っているのか／／偏狭な私の伝統は果てしく 今 私の前に情緒として／横たわっている／例えばこんなことがあつた／釜山の捕虜収容所の第14野戦病院にいる時／情報員がナースたちとスポンジを作り ガーゼを／折りたたんでいる私を見て 捕虜警察にならず／男がなんでこんなことをしているのかとからかったことがあつた／ナースの傍らで／／今も反抗していることは このスポンジ作りと／ガーゼを折りたたんでいることと少しも変わらない／犬の鳴き声を聞き その悲鳴に参り／尻の青いガキのねだりに負ける／散る銀杏の葉も 私が踏んでいく棘道／／どうしてもよけている 絶頂に立たず／どうやっても少しばかり よけて立っている／そして少しばかり横に立っていることが少しばかり／卑怯なことだと知っている／／だからこんなにけちくさく反抗する／床屋に／地主にはできずに 床屋に／区役所職員にはできず 床屋に／夜警たちに20ウォンのために10ウォンのために1ウォンのために／滑稽じゃないか1ウォンのために／／砂よ私はどれくらい小さいのか／風よ塵よ草よ 私はどれだけ小さいのか／ほんとうにどれだけ小さいのか……

(拍手)

佐相憲一（司会） 楊原泰子さん、ありがとうございました。

さて、今度は一九七三年生まれの東京在住の白糸雅樹さんです。今日は夫さんの奥主榮さんと一緒に朗読していただきたかったですけれども、奥主さんの方がご用事で来られませんので、白糸さんにご自分の作品と奥主さんの作品と両方朗読していただきます。詩歌集『ゆらぎ』を出されていて、短歌集団「かばん」などにも参加されています。今期待の書き手です。白糸雅樹さんよろしくお願いします。

白糸雅樹 こんにちは。白糸雅樹と申します。今日仕事で来られなくなった夫の奥主榮の詩と、そのあとに私の詩を読みます。

勝利者たち 奥主榮

敗北を知らないまま僕たちは／登ることができない高い塔を築き／地の底へと深く腕を差し入れた／脆弱な建物のあいまに／支配できないものは存在せず／唇からは凱歌だけがこぼれ出した／ゆるやかな海岸線も 力強い山の稜線も／思うままに歪めるためだけのもの／高く掲げたかがり火を誇り その光が／何を地上にもたらしたかを喧伝し／くり返すのは火付け強盗のような真似ばかり／僕たちは王としてふるまい／裸の姿を笑う子どもは見つけられないまま／相手の扱いがぞんざいだと感じると／それを高慢と思うこともないまま罵った／あるときには家畜の群れを追う声をあげ／またあるときには不正を糾す杖を振り上げ／真新しい制服の袖を血にひたした／刻み 寸断し むさぼり／奪い尽くしたものの残り香さえも／かけらも残さないようにと 深く吸いこんだ／なれ親しんだ景色のこごとくを支配し／見知らぬものへと塗り変えていった／驕慢な声だけをもらしながら／僕たちを生み育んだ／あらゆるものが見知らぬ風景へと変貌し／かつてはあれほど焦がれていた／新しいものばかりの世界となったときには／僕ら自身が老いていた／僕たちはもう忘れられるべきもの／塗り込められていくべきものと／なりはてていたのだった

姉が踏み出した向こう側 白糸雅樹

姉が死んだ／享年六十歳／姉がまだ若かった頃／いつもうちに夕飯を食べに来ていた青年が居た／学生運動でさかんに活動していて／「あぶないことをするんじゃないのよ」と心配するうちの母に／「だいじょうぶだよ、おばさん。ボクはエライんだから。あぶないことは兵隊がするのさ」と答えていたが、／ある日、車に乗っていて、敵対する党派の車と行きあい、電柱に衝突して死んだ／（彼の父親はつぶやいた）／「どこからうちの息子の隠し子が出てこないかなあ出てこないかなあ」／姉と彼のあいだにどのような交流があったかなかったか、私は幼くて知らない／姉は見合いして嫁ぎ、すぐに離婚して帰ってきた（盛大な披露宴の写真は残っているが、足入れ婚だったという。）／以後、実家で、のんきに暮らしていた。／姉は編み物をしてみたり刺繍をしてみたり一見気楽そうだったが／ある日、突然、言葉の通じない世界へふいと足を踏み入れた／「違うの。違うの」と「そうよ、そうよ」を繰り返し口に／食べ物も薬も受けつけず、厠へ立つこともせず／衰弱して息絶えた／〈何故入院させなかった〉〈何故入院させなかった〉／それは今言ってもはじまらぬこと。／生命だけをつないでも、ただ病院で生かされることが幸福であったとは思われないし、／それをいうなら／いや、姉が家族だけを相手に気楽で幸福だったのかどうか。／（姉の生活を幸福だと思いたい私が居る）／……ええ、そうです。ご存じないのも無理はない。牡丹の咲ころ亡くなりました

（拍手）

佐相憲一（司会） 奥主榮さんの詩の方は鋭くエキセントリックな感じで読んでいただき、白糸雅樹さんの詩の方はしみじみと読んでいただきました。お二人とも力のある書き手として、これから是非応援したいと思いますので、いい詩を書き続けて下さい。白糸雅樹さん、ありがとうございました。次は栃木から来ていただきました、貝塚津音魚さんです。最近、詩集『魂の緒』で栃木県現代詩人会

新人賞を受賞されました。おめでとうございます。(拍手)。詩誌「衣」、日本詩人クラブなどで活躍です。貝塚津音魚さんよろしく願います。

貝塚津音魚 貝塚と申します。栃木県の大田原というところから来ました。

母は二〇〇八年の四月に肝臓がんの宣告を受けました。いつも「量の上で死にたい」と言っていたので、病院には入院させずに家で看ることになりました。八月くらいになりますと自分の肝臓のあたりを友だちに見せまして、こころあたりが硬いんだ、なんて言っていました。母は狭心症も患っていて、時々倒れたりもしました。母ががんの宣告を受けて、私は五月に退職しまして、五月から九月の間、毎日自家用車で医者へ連れていきました。休日は先生に往診をしてもらう。先生は八月ごろになると、あぶないんじゃないかと時々言われてましたけれども。母ももういつ死んでもいいんだと言っていましたけれども、身の置き所の無い日々だったと思います。十月ころからは寝込んでしまって、先生の往診が毎日続いていたんですけれども、このころは飯を作って、下の処理とか、私自身はやっておりました。十一月に入ると、まったく飯も食わない、水と氷だけです、三週間生きていたという記憶がありまして。介護に疲れて、時より外に出てみると、家の周りは林でして、雪虫が飛んできて、辺りをさ迷っている、もう冬なんだなあ、と、深い感慨を持ちました。母はさすがに「死ぬのは怖い」と言っていました。よく夢うつつで「よいしょよいしょよいしょ」という言葉をつづやいていました。死ぬと四十九日間家の周りに留まって、浄土への旅の準備をするといわれています。

お坊さんが「最近は何年寄りに住んでいる若い人が少なくなったなあ、それで何でもお寺に聞にくるんだ、こんな話がありました」と話してくれました。お盆前にお坊さんに檀家の女性から直接電話があって、昨年主人を亡くしたと、誰にも言わないでね内緒ですよ、ということで、私好きな人が出来て一緒に住んでいるです、お盆になったら主人の魂が還ってくるでしょ、と、そうすると三角関係になって困るでしょ、だからお寺で主人の魂を預かってくれないか、ということで、世の中も変わった、これでは魂も浮かばれないなあ、とお寺さんもそういう話をしとったんですけれども、お寺さん自身もですね、若者夫婦が町へ出ていって帰ってこない、お布施をしないとお墓を壊して切り売りしちゃうんですね。今後、魂の居場所ははどうになってしまうのかと危惧をしています。

一陣の風 貝塚津音魚

母が死んで／母の寝ていた部屋で弔いの日々を送る／生前「死ぬというのはこわいな」と何度も呟いた母／真夜中部屋に一陣の風が吹き目が覚める／暗闇に眉間に縦筋を立てた鬼の形相の母がいる／闇の向こうで叫んでいる「俺を助けろ！」と／冷たい爪の伸びた鬼のような手が伸びて来る／一瞬身をかわす／この手に触れたら闇に引き込まれるという本能が働く／よけた瞬間背筋に冷や汗がはしる／おれは死にたくねえ！ おれは死にたくねえ！／冷たい爪の伸びた鬼の手が闇の中から次々に飛んで来る／闇の中をひたすら走って逃げる 逃げる 逃げる／母の寝ていた部屋には生に対する情念が渦巻いている／毎夜このおぞましい恐怖と闘いながら弔いの長い夜を送る／／やがて四十九日／母の情念も薄らいで安らかな眠りの日が訪れる／死ぬ直前 夢うつつうわごと／「よいしょ」「よいしょ」「よいしょ」と呟き／三週間も食わずに往生した母／一升米を背負って遥か山を越え／極楽浄土への旅の夢を見ていたのだろう／今 母の魂は黄泉路をたどり／やっとなんて浄土への入り口に着いた／これから遥か浄土への旅を辿って行くのだ／部屋からは情念が消えてその後一陣の風が吹くことはない

魂の盆帰り 貝塚津音魚

父の魂が／母の魂が／迎え火に連れられて遣ってくる／そして ふる里を忘れかけた子どもたちを／昔懐かしい故郷へ呼び戻す／今も 素直に生きているかと／父の魂が／母の魂が／都会で疲れ荒れ果てた心を／優しく包んで癒してくれる／そして 幼い頃の真っ直ぐな心にもどして／「また……来年も来るね」と私たちの心(むね)に／無言でささやき 微笑んで／風鈴の音に ひぐらしの声に送られ／盆提灯にゆられ／ひっそりと帰って行く

(拍手)

佐相憲一(司会) 貝塚津音魚さん、ありがとうございました。

続きまして、増田幸太郎さんをお願いいたします。増田さんは北海道のお生まれで、東京にお住まいです。中上哲夫さんたちと一緒に書かれている詩誌「木偶」では編集発行人でいらっしゃいます。増田幸太郎さんお願いします。

増田幸太郎 増田幸太郎です。貝塚さんのお話を聞いてですね、やっぱり鎮魂というものがそういうところまでいくのかなと思いました。大変立派なこの『鎮魂詩四〇四人集』に私も参加させていただいたわけなんですけれども、本当にうれしく思います。すばらしい皆さんが二十世紀の悲劇をこうやって残した、これはひとえにコールサックの鈴木さんの功績だろうと思うのですが、こういう企画が無ければ、この四〇四人のすばらしい詩がですね、散逸して見る事が出来ないわけですね。こうやってこの日本が始まって以来の二十世紀の悲劇がですね、こういうような形でまとめられる、そして残されていく、まさにブラボーと言ってもいいんじゃないかと思います。例えばもしこの戦争が無くて、平和がずっと続いていて、こういう鎮魂という企画をやったとしたらどんな言葉たちが集るんだろう、というようなことを考えながらこの本を読み終えました。私の詩は短いのですが、「いとおしむ」ということで読ませていただきます。

惜 増田幸太郎

秋晴れの／乾いた光が落ちている／／透明な深い空から／孤高の気配がとどく／「只今」の／声がする／／部屋は在りし日のまま／洗濯竿にパジャマ／タオルが風に揺れている／／秋の日差しにまぎれて／その人は立つ

(拍手)

佐相憲一(司会) 増田幸太郎さん、ありがとうございました。詩情豊かな印象深い朗読でした。

さて、最後になりました。郡山直さんご登場です。鹿児島県奄美喜界島のお生まれで、神奈川県相模原にお住まいです。今年の初めに詩集『詩人の引力』を刊行されました。海外の教科書には郡山さんの英語で書いた詩が掲載されているそうです。英語と日本語のバイリンガルで詩を書く人たちの詩誌「ポエトリ・ニッポン」などでご活躍です。では、郡山直さん、よろしくお願いします。

郡山直 みなさんこんにちは。私は郡山直と申します。昭和三六年に東洋大学で勤め始めて、ちょうど三六年間ここで勤務しました。十三年前一九九七年にですね、定年退職して、年に一度くらいですね、詩の特別講義を頼まれて来ていました。前にコールサック社が『原爆詩一八一人集』というのを出しましたけれども、それは核兵器の廃絶を願う詩集でした。

今夜は月が泣いている 郡山直

今夜／二〇〇三年十月十日の夜／月は霞に隠れて／泣いているように見える／ブッシュ大統領が始めたこの愚かな戦争で／殺され傷つけられた人々のために／月は泣いているのだ／多くの人間／アメリカ、イギリス、オーストラリアの兵隊だけでなく／多くのイラク市民、／子供たち、女性たち、老人たち、／国連職員、／イラク警察官たちも／ブッシュ大統領が始めた／この愚かな戦争で／命を失ってしまった／両腕を失ったイラクの少年の世話は／誰がするのか／誰が彼に食事を与えるのか／誰が彼の排泄を手伝い／尻を拭くのか／死んで浅い墓に埋められて／野良犬に掘り起こされて／食べられたイラク少年のことを／ラムズフェルド国防長官はどう考えているのか／この戦争は間違った戦争だったのだ／この戦争がもたらした混乱を誰が始末するのか／イラク戦争は／人類の歴史のなかで／もっとも悲しい戦争だ

(拍手)

佐相憲一(司会) 郡山直さん、ありがとうございました。

ご来場の皆さん、ご出演下さった皆さん、本当に今日はありがとうございました。そして、長時間、お疲れさまでした。おかげさまで、充実した会となりました。これで全プログラムが終了しました。

今日の内容は「コールサック」六八号に再録されます。その六八号の締め切りは十一月二十日です。「コールサック」は書店にも置かれるようになり、今とても元気な全国詩誌だと大きく注目され、話題になっています。会員制や同人制をとらずに、才能のある全国各地の方々に開かれた詩誌ですので、よろしかったら、是非ご参加下さい。詩も評論もエッセイも大歓迎です。また、ホームページもリニューアルしまして、メールマガジンも始めました。早速、ホームページや書店でコールサックを知った方々から、「共感した」「自分も参加したい」などの声が届いています。若い方々の新参加も続き、あらゆる世代の、幅広い傾向の発展があります。詩集など詩書の刊行も続き、良い本を世に出すお手伝いに張り切っております。今後とも、どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

(拍手)

最後に、閉会の言葉を長津功三良さんよりいただきます。

〈閉会の言葉〉

長津功三良 『鎮魂詩四〇四人集』・高炯烈詩集『アジア詩行』合同出版記念会、本当に皆さん、長時間のご静聴をありがとうございました。これから新しい企画なども出ると思うのですが、趣旨にご賛同いただければ、またご参加いただきたいと思います。

これから四号館のB階で懇親会をやります。たくさんご遠方からもいらっしゃっているので、是非懇談の場を持ちたいと思います。

長時間本当にありがとうございました。またお会いしましょう。

(拍手)